

ライアン・ガンダー 1976年、英国チェスター生まれ。マンチェスター・メトロポリタン大学、アムステルダム・ライクアカデミーなどで学ぶ。作品は彫刻、映像、執筆、インスタレーション、パフォーマンスなど、多岐にわたり、国際的に高い評価を受けている。

「医療とアートの融合」をテーマに、美術や音楽などを通じて癒やしの環境づくりに取り組む岡山旭東病院(岡山市中区倉田)が、英国の現代アーティストライアン・ガンダー氏が制作したオブリジェを新たに院内に設置。同氏を迎えてのお披露目のセレモニーがこのほど、病院関係者や市民ら約150人が参加し、同病院1階のバッチ・アダムスホールで開かれた。

岡山旭東病院 院長 土井 章弘氏 対談 ライアン・ガンダー氏 アーティスト

土井章弘院長(74)が「エネルギーがエネルギーを呼ぶ込んでつにまとまってい



熱心に耳を傾ける参加者たち

現代アートで病院を癒やしの空間に

岡山旭東病院でお披露目



どい・あきひろ 1939年、岡山県生まれ。鳥取大医学部を卒業後、岡山大学医学部脳神経外科入局。米国ペンシルベニア大ブロードストリート病院留学、香川県立中央病院主任部長などを経て88年から現職。岡山県中小企業家同友会常任相談役。前岡山県病院協会会長。

大切なのは目に見えない力 土井氏 人生経験がイメージを広げる ガンダー氏

土井 現代アートは、非常に自由な発想から生まれる芸術だと思います。人によつては「なんだかわからない」という人もいたり、難しいと捉える人がいたり、見方も分かれま

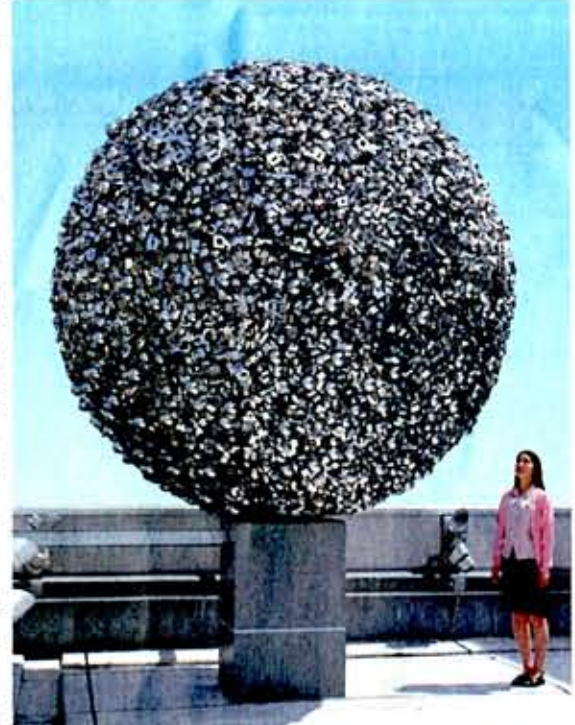
けれど、初めて見る人は誰もが「これなんだろ」と想像を巡らせます。それだけに、あまり最初から意味づけすることはしない方がいいように思います。

ガンダー その通りですが、それによって作品も完

成されていくように思いますが、球体が光を受けてキラキラ輝く様に元気をもらえたり、癒やされたりしています。当病院では、癒やしの環境を整えることは先進医療を提供することと同じく重要なことと考えています。「治療」という言葉があ

るように、気持ちを引き立てるものがあれば、元気にもなり免疫力も高まっています。特に現代アートの場合、見る人の人生経験が、作品のイメージを押し広げ、それによって作品も完

またま落下してきたイメージです。これまで遭遇したことのない「未知のもの」があるいは「身近でないもの」だから、どんな用途でなんの目的で作られたか、誰の持ち物で、値段はどのくらいかといった質問に対して説明できないのです(笑)。人間は、よく理解できないものに対してワクワクするのではないのでしょうか。少なくとも私はそうです。



アーティスト トーク ライアン・ガンダー

私は車椅子で生活していますが、20歳までの10年間を病院で過ごしました。子ども時代は学校にも行かず、ずっとベッドの上でしたので、毎日が退屈で仕方ありませんでした。そんな私を見かねて、ある日看護師さんがアートボックスをプレゼントしてくれました。中には、絵の具や絵筆、紙や布、ペンチやカッターなどアートに必要な材料や工作道具がたくさん入っていました。それはまさに私のための小さな工房で、それが私とアートの最初の出会いでした。

とにかく毎日違うことをして違うところに行きたかった私は、想像力を鍛え、空想の世界で遊ぶことも覚えました。想像

力が強ければ、描くイメージはより現実的に感じられます。空想の中で海岸を楽しく散歩することもできます。あらゆること

病棟内はまるで迷路のようです。方向を説明されてもどっちに行けばいいかわからない。廊下に葉っぱの模様やカラフルな誘導テープを張ると一目瞭然。それに沿って歩けば目的地にたどり着けます。こんなふうに、アートで楽しい仕組みを作ること



ユーモアを交えて話すガンダー氏

アートの力でよりよい未来を